

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
495	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
Effects of moderate consumption of distilled and fermented alcohol on some aspects of neuroimmunomodulation. 神経免疫修飾の観点から見た蒸留酒と発酵酒の中程度の摂取の影響	
執筆者	
Diaz LE, Cano P, Jimenez-Ortega V, Nova E, Romeo J, Marcos A, Esquifino AI.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Neuroimmunomodulation. 2007;14(3-4):200-5.	
キーワード	
アルコール、蒸留酒、発酵酒、リンパ球、ホルモン、神経伝達物質	
要 旨	
<p>アルコール飲料は蒸留酒か発酵酒か、またはアルコール度数によって特徴づけられる。慢性アルコール摂取の有毒作用はよく知られているが、中程度のアルコール摂取の効用については証拠が少ない。本研究では、中程度のアルコール摂取（ビールまたはエタノール）が血漿ホルモン濃度、血液や胸腺のリンパ球表現型、脳の神経伝達物質レベルに与える影響について調べた。ラットを4群に分け、対照群として水を投与する群とアルコール分のないビールを投与する群、実験群としてビールを投与する群とエタノールを投与する群を作り、エタノールは中程度の摂取量となるように1日当たり1.16g/kg体重を与えた。この結果、血液や胸腺のリンパ球表現型は対照に比べ、エタノール群とビール群のどちらも顕著な違いはなかった。血漿プロラクチンは水を投与した群と比べ、アルコール分のないビールを投与した群、ビールを投与した群、エタノールを投与した群で顕著に減少した。エタノール投与群で成長ホルモンが増加し、ACTHレベルが減少する傾向が見られたが、影響は顕著ではなかった。また、正中隆起や下垂体におけるドーパミンやGABA濃度も、エタノールやビール摂取によって顕著な変化を受けなかった。この他、エタノール投与群で下垂体におけるタウリン濃度が顕著に上昇していることが明らかになった。</p>	